

ふるさとづくり

ガイドブック



ごあいさつ

古来、美しい自然と美しい文化の中で、私たち日本人はその営みを続けてきました。私たちが育った地域を「ふるさと」と認識し、愛し、そして公共の精神や道徳心をつちかってきた、そういう歴史を持っているのではないかと思います。

今まで古来より培ってきた意味での「ふるさと」をどう守り大切にしていけるのか、人生を豊かにする上においても、人それぞれが所属する場所、「ふるさと」はどうあるべきかということについて、木村総理補佐官（ふるさと担当）を中心に、「ふるさとづくり有識者会議」でご議論いただき、平成25年7月3日に「中間報告」をいただいたところです。

この度、その概要をガイドブックとしてわかりやすくまとめていただきましたので、皆様是非ご活用ください。

内閣総理大臣 **安倍晋三**



最近の日本をとらえ次世代に思いをした時、国民の皆様一人一人が、誇り、協力し合う精神、未来に向けた活力を取り戻す必要があると思います。

私は、ふるさとを愛する気持ちを育むことは、地域の共同体の連帯を確かなものとするだけでなく、日本人としての誇りを取り戻し、世界からも信頼され、豊かな国としての我が国の更なる成長につながるものと考えます。

ところが現実には、ふるさとの原風景は失われつつあり、私は、活力の源であり、誇りであるふるさとの価値を再認識し、後世に伝えていくにはどうしたらよいか日々考えて参りました。

この度、「ふるさとづくり有識者会議」の皆様方とともに、ふるさとづくり推進についての基本理念や施策のあり方について熱心な議論を重ね、ヒントになる現場の視察の成果を加えて「中間報告」を取りまとめ、安倍総理に報告いたしました。この「中間報告」の概要をガイドブックとして簡潔にまとめましたので、全国津々浦々でふるさとづくりに取り組む皆様にご活用いただけると幸いです。

内閣総理大臣補佐官 **木村太郎**



いま、なぜ

「ふるさとづくり」なのでしょうか？

従来から美しい自然と文化の中で、私たちは、その営みを続けており、
日々の暮らしの中で、自分が生まれ育った場所を
「ふるさと」と認識し、愛してきました。
「ふるさと」に帰属しているという意識が、私たちに安心感をもたらしてきたのです。
「ふるさと」は、いわば心のよりどころでした。

そして、その「ふるさと」の原風景には、青き山、清き川、風や空、祭りなど、
世代を超えての一定の原型があるように思われます。
しかし、実際には途絶えてはならない原風景が失われつつあるなど、
現実と「ふるさと」の原型に隔たりが生じています。

また、大都市に人口が集中している現状においては、
自分が生まれ育った場所が「ふるさと」であるという認識をもたない人も増えています。

このような状況を踏まえると、
私たちの活力の源であり、誇りである「ふるさと」の価値を再認識し、
「ふるさと」を愛することの大切さを後世に伝えていくことが必要ではないでしょうか。
そして、そのために、「ふるさとづくり」をどのように進めていくかを
今、考えてみるべきではないでしょうか。

「ふるさとづくり有識者会議」は、そのような問題意識のもと、
「ふるさと」について改めて思いをいたし、
「ふるさとづくり」の意義や手法などについて多方面から議論したものです。



「ふるさとづくり」とはどういうことでしょう。

「ふるさと」は、
生まれ育った場所だけではありません。

「ふるさと」は、
私たち日本人一人ひとりが、
自分のよりどころとなる
「ここをよせる」やすらぎの場を指します。

愛する人が住むところかもしれない。
偶然訪れた村や町かもしれません。
「日本全体が、私のふるさと」
という人もいます。

大切なのは、「ここをよせる」
ばかりではなく、
何かのかたちで、
「そこにかかわる」こと。

小さなことでもかまいません。
そこに旅にでかけてみる。
その土地の産品を買ってみる。
そこに住む人といっしょに
汗を流して働いてみる。



少しの「かかわり」で、
「こころをよせる」気持ちが強くなる。
それがきっかけとなって、
さらに深く「かかわる」ようになる。

このくり返しが新しい「ふるさと」をつくります。

愛着のある場所との「かかわり」によって、
失われつつある「ふるさと」への誇りと価値を
ふたたびつくりだす。


新しい「ふるさと」は、100年先の子どもたちまで
受け継がれるものになっていきます。

こころをよせる
そこにかかわる

ふるさとづくりとは、
ある場所に「こころをよせる」ことと、
「そこにかかわる」ことのくり返しです

“こころのよりどころ”
としてのふるさと

こころをよせる
(精神的態度)



“生活の営みの場”
としてのふるさと

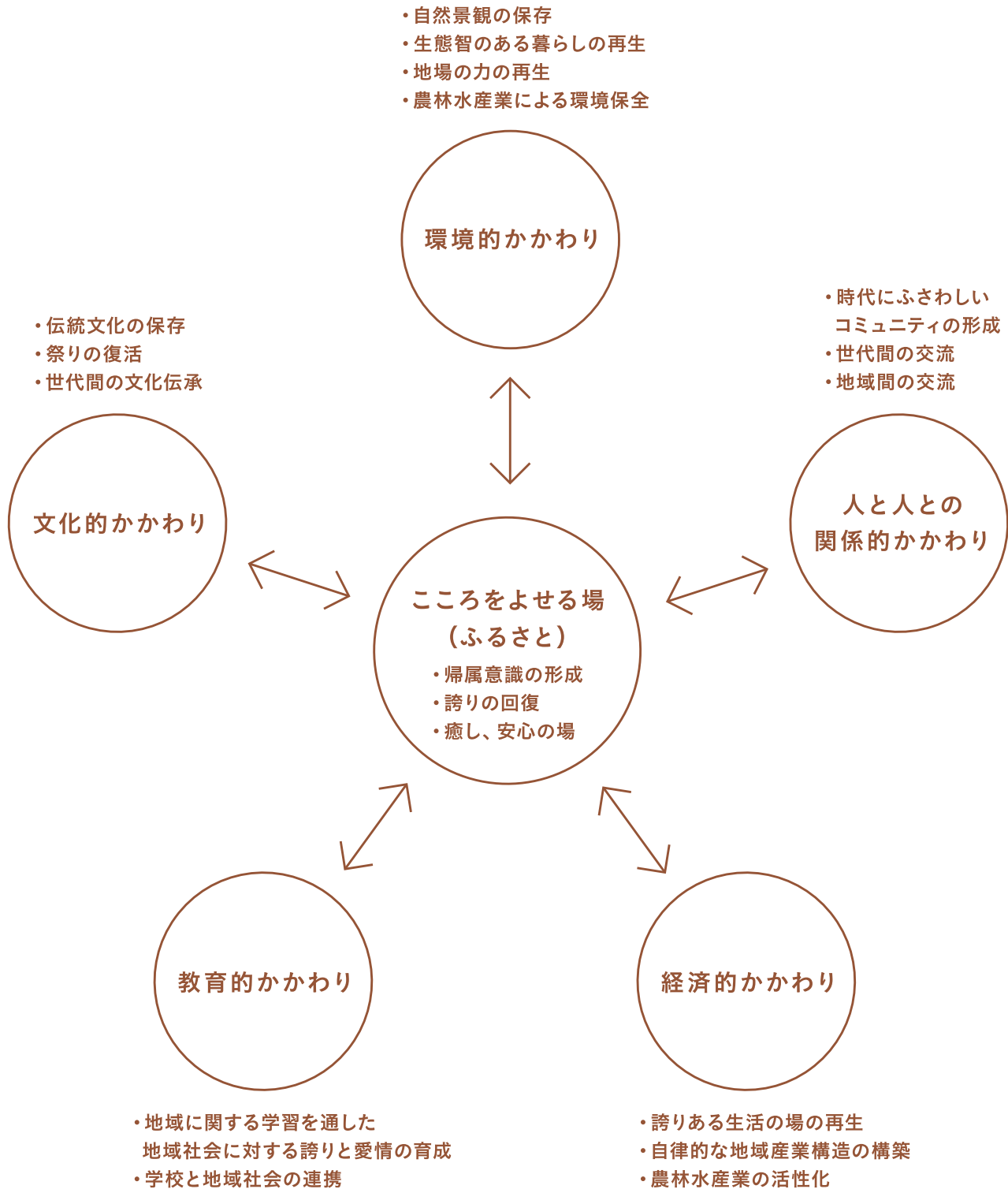
そこにかかわる
(実践的態度)

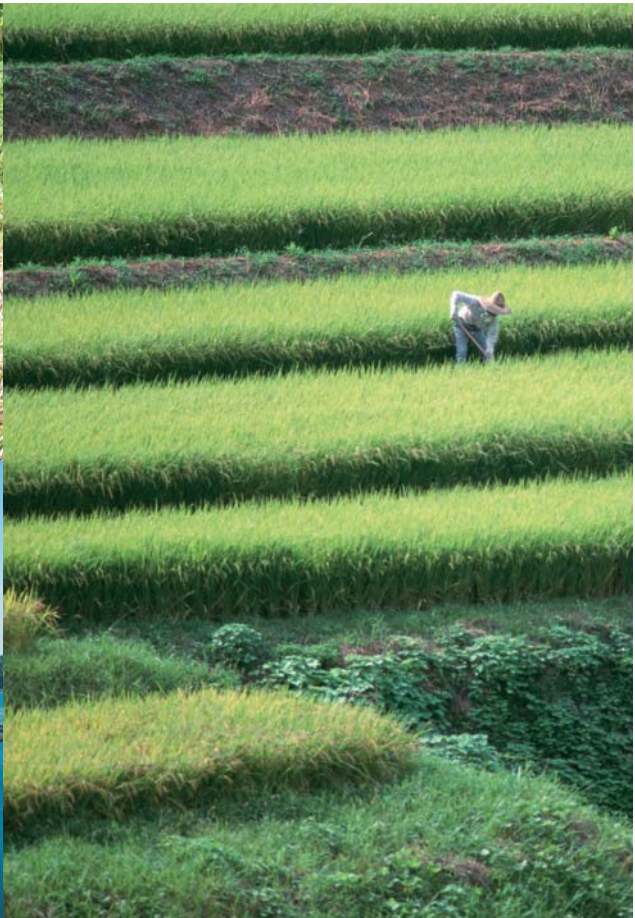
このくり返しが、新しい「ふるさと」をつくれます。
愛着のある場所との「かかわり」によって、
失われつつある「ふるさと」への誇りと価値をふたたびつくりだす。
新しい「ふるさと」は、100年先の子どもたちまで受け継がれるものになっていきます。

さまざまな「かかわり」が、ふるさとをつくります

ふるさとづくり 5つのかかわり方

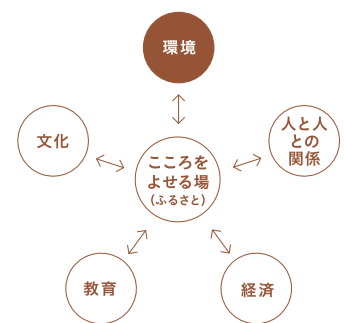
「こころをよせる場」との「かかわり」にはいくつかのインターフェイスが存在し、人により、さまざまな要素や深さ、単位で「かかわり」をもつことにより“かかわりのネットワーク”が構築されます。





【環境的かわり】

美しい自然の景観を、後世に残していこう。
それが、ふるさとを守ることにになります。



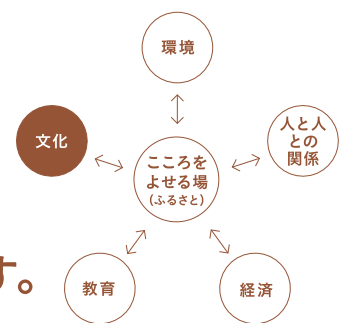
私たち日本人の原風景としての美しい景観を後世に残していく。それも箱庭のように静かに保存するだけでなく、そこに自然と人間の営みのバランスがとれた「生態智」をきちんと保っていくことが大切です。ふるさとづくりは、自然と生活をもっと仲良くさせていくことです。

☞ 「環境的かわり」に関する施策事例は、「ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集」のP57～72をご覧ください



【文化的かかわり】

伝統文化という価値への理解を深めよう。
それが、その土地ならではの知的活力になります。



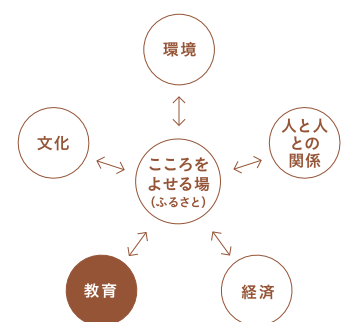
長い歴史や伝統に育まれてきた「祭り」や「芸能」。こうしたその土地ならではの伝統文化を、子どもや孫の代へとしっかり受け継がれていくようにしたい。歴史の浅い土地でも、そこに生まれた新しい文化を見つけ、その土地ならではの知的活力に育てよう。

☞ 「文化的かかわり」に関する施策事例は、「ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集」のP58、P61、P68、P73～84をご覧ください



[教育的かかわり]

**ふるさとの文化を学ぼう。そこから
その土地への誇りと愛情が育っていきます。**



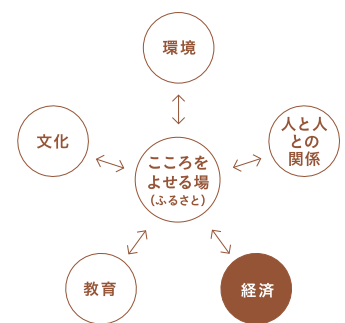
ふるさとの資産や歴史をもう一度学び直す。古い土地でも新しい土地でも、人々がその土地でどのようにかかわり、暮らし、愛してきたかを知ること、新たな魅力が発見できるはず。その土地の人々の努力や愛情が、今も受け継がれていることを知れば、ふるさとに対する誇りと愛情は、もっと強くなるでしょう。

☞ 「教育的かかわり」に関する施策事例は、「ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集」のP72～73、P85～99をご覧ください



【経済的かわり】

**大胆なアイデアと熱い情熱で、
地域の産業に力を与えていこう。それが、
ふるさとへの気持ちを強くしていきます。**



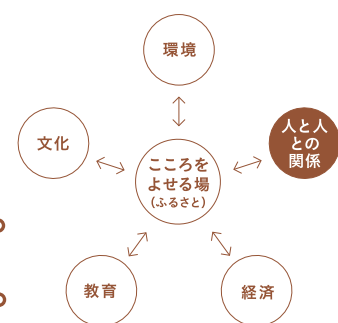
多彩な才能と熱い情熱が結集し、新たな地域産業を担う人々や組織を育てていく。そこに暮らす人々の生活を潤し、地域の活力がさらに高まるような仕事をどんどんつくる。経済の力で、ふるさとへの気持ちをもっと強くしていきたい。

☞ 「経済的かわり」に関する施策事例は、「ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集」のP58、P61、P68、P96～97、P100～120をご覧ください



【人と人との関係的かわり】

**地域や世代を超えて、人々の交わりを広げよう。
そこから、新しいふるさとが生まれていきます。**



昔ながらの地縁・血縁に止まらず、新たな縁や絆が生まれつつあります。都市と農村の地域を越えて、世代や年齢を越えて、今まで交流のなかった人々とも交わりを広げよう。そこからこれからの「ふるさと」にふさわしい、新しいコミュニティが次々と育っていきます。

☞ 「人と人との関係的かわり」に関する施策事例は、「ふるさとづくり推進のために～施策・取組事例集」の P58、P85～86、P93～95、P101、P116～119、P121～136をご覧ください

ふるさとづくり有識者会議・座長

小田切徳美教授

今後の「ふるさとづくり」を推し進め、着実に成果を出していくために、「ふるさとづくり有識者会議」として、まずはこのような取組が必要だと考えました。

[提言1]

「ふるさと」に対する誇りを回復するために、「ふるさと学」を推進する。

ふるさとの新しいモノサシづくりを

「ふるさとづくり有識者会議」のメンバーが議論を重ねる中で、数多くのアイデアや提案が出されました。中でも「これは重要だ」とみなさんがいったものをご紹介します。

ふるさとには、さまざまなかたちがあります。農村もあれば



いくつかの自治体では、教育の一環として「ふるさと学」を授業などに取り入れる動きも始まっています。

漁村もある。古い伝統文化を持った地域もあれば、世代ごとにネットワークを築くニュータウンのような地域、これもふるさと

と呼べるでしょう。

高度経済成長期、私たちはこれらの「ふるさと」を画一化されたひとつのモノサシではかってきてしまいました。このモノサシのもとでは豊かな自然や濃密な人間関係は、時代遅れの象徴のようになり、地域の個性は削り取られてしまいました。その結果、ふるさとに対する心を失う「誇りの空洞化」と言われる現象を招いてしまったのです。

私たちはこの古いモノサシを捨て、地域の個性や宝を知る「気づき」をベースに、地域独自の「ふるさと」の価値をつくりあげていく必要があります。

ふるさとに心をよせ、そこにかかわる

ふるさとに心をよせるということは、何かをする、かかわるという行動へとつながります。Iターン、Uターンなどもその好例です。ボランティアを通じて、積極的にかかわるという人もいます。一方、何をしたらいいかわからないけれど関心を持っている人たちも多数います。こうした人たちには、できることから始めよう、と階段を示してあげることが大切です。インターネットを使って地域の産品を買う、地域の歴史や文化を学ぶなど、かかわる方法はいくらでもあります。

ふるさと学の実践

ふるさとに心をよせる人たちにとって、よき道しるべとなるのが「ふるさと学」です。「ふるさとづくり有識者会議」の多くのメンバーが、ふるさと教育の大切さを指摘しました。これは、かつての藩校教育はわかりやすい例でしょう。地域の独自の価値観に基いた学びの体系があり、街道ごとに文化圏が形成されていました。私たちも「ふるさと」の現状や地域の魅力、歴史などを体系的に整理して深く掘り下げてみる必要があります。そこで再発見したものを、学校、公民館・図書館、美術館、あるいはインターネットなど、さまざまな場所と方法で、世代を超えた多くの人々が学べるようにします。これによって「ふるさと」に対する理解が深まります。ふるさととのかかわりを考え、新たな行動を生み出すきっかけにもなります。

小田切徳美 (おだぎりとくみ)

1959年神奈川県生まれ／1988年東京大学大学院
博士課程修了(農学博士)／1995年 東京大学農
学部助教授、東京大学大学院農学生命科学研究
科助教授／2006年 明治大学農学部教授(現職)
専門分野:農政学、農村政策論、農業経済学



[提言2]

「ふるさとづくり」の担い手を育てるために、 ふるさとコーディネーターを育成する。

「交流の鏡」となる人づくり

ふるさとづくりには、担い手となる人材も必要です。とくに重要となるのは、地域の魅力を発見し、それを掘り起こす役割となる外からの人材です。

「交流の鏡」という機能をご存じでしょうか。外部の人が地域に入り込むことで、地元の人たちも気づかなかった資源が発掘され、化学変化が起きるようになるといわれています。いわゆる“よそもの”には、鏡のように地域を照らし出す力があるのです。

しかし地域によっては、よそものと打ち解けるのに時間がかかるケースもあります。それでも外部の人が声をかけ、まずは小さなことでも一緒に行動するというのを続ければ変わっていきます。そうやって「この地域にもまだ可能性がある」とみんなが思えるような説得力ある行動を起こせる人材をつくる。これが「ふるさとづくり」で最も

大切な要素です。

ふるさとづくりコーディネーター

「ふるさとづくりコーディネーター」は、ふるさとに対してさまざまなかたちでの「かわり」を推進していく核になってくれる人。また「ふるさと」の価値を守り、創り、次の世代へつなげていくだけの熱意と

知識と行動力をもった人を求め、育成していきます。

まちづくりには3つの「者」が必要といわれます。前述の「よそもの」に加え、実働部隊として積極的に行動に移すことのできる「わかもの」、そして心底ふるさとを愛し、地域内で新しい風を起こそうとするアイデアマンの「ばかもの」です。どの要素も「ふるさとづくり」には大切です。こうした人々と地域の人々が互いを認め合い活性化していく関係をつくっていく必要もあります。

プロフェッショナルであること

「ふるさとづくりコーディネーター」は、この地域で「何かをはじめよう」という機運が起きた時にネットワークを駆使し、具体的な解決策を見つけ出すプロであることも求められます。内側に入り込んで環境を整えていくためには、開かれた地域であることが必要です。たとえそうでなかったとしても、交流や励ましを粘り強く繰り返し、慣れと訓練によって開かれた地域へと変えていくことが大切です。そのための育成プログラムやバックアップ体制などの支援策も重要な要件になるでしょう。



ふるさとを今まさに支える若者に「ふるさとづくり」の理念や具体的な方策を教えるコーディネーターの育成が必要です。

[提言3]

地域の主体的な取組を後押しするために、 全国のふるさとづくり推進組織と協働する。

従来型の活動から攻めの活動へ

「ふるさとづくり」は全国さまざまな地域で行われています。多くの人々が知恵と汗を絞っています。各自治体（47都道府県、1742市町村）には、ふるさとづくりにかかわるおよそ3300（H25.6.26現在）もの団体がすでに存在しています。

従来型の組織としては地域の町内会、集落、コミュニティなどがあり、ごみ収集、草刈、祭りなどのいわゆる自治活動を行っています。しかしこれからの「ふるさとづくり」においては、そこから一歩踏み込んだ攻めの組織、攻めの活動が求められます。攻めの活動が行われるためには、多様な人たちが新しいことをはじめるための支援が必要です。

すでにある組織を連携させる

すでにある「ふるさとづくり」の活動には、多くの成功事例があると同時に、それを上回る失敗事例もあるはず。しかし多くの人がかかわったこれらの事例は、たとえ失敗だとしても宝の山のはずです。各自治体や諸団体が先行事例や有識者たちの成功事例を情報共有すれば、成功への確率がぐんと高くなること

でしょう。団体同士の連携を促すことにもつながります。また先行事例を研究することで新しい発見があるかも



各自治体や推進組織が、「ふるさとづくり」にかかわる団体をサポートすることが重要です。

しれません。さらにはそれぞれの団体が推進したい方向性に対して、ふさわしい政策や制度的なメニューを提示することで、「ふるさとづくり」をサポートすることが必要にもなってきます。

見つめる、意識を高める

各自治体や推進組織が、間接的なサポートをすることも重要です。団体の自主性を尊重しながら側面から見つめることで、団体交流や、ネットワークの広がりへと発展し、新しい知恵や可能性が生み出されるというケースもたくさんあります。大切なのは「ふるさとづくり」にかかわる人々を、みんなで見つめることです。モニタリング効果によって、人々の意識を高めることができるのです。

具体策として

具体的にはこの「ふるさとづくり」の啓発資料を活用して、有識者や各省庁を交えて、全国各地の推進組織による「ふるさとづくり」を強力にサポートすべきだと考えています。

まとめとして

以上については、今後、国の関連施策をうまく活用しながら、各地域の取組を推進するとともに、施策のさらなる充実を検討する必要があります。

「ころをよせる。そこにかかわる」
そのために私たちは何を考え、どんな行動を起こせばいいのか、みなさんも一度考えてみてください。

これらについては、今後、国の関連施設を活用しながら、各地域の取組を推進するとともに、施策のさらなる充実を検討していきます。

ふるさとづくり有識者会議メンバー



大南信也
(NPO法人グリーンバレー理事長)



中貝宗治
(兵庫県豊岡市長)



小田切徳美
(明治大学農学部教授) ※座長



濱田純
(秋田大学地域創生センター准教授
(兼)北秋田分校長)



鎌田東二
(京都大学こころの未来研究センター教授)



原範子
(全国生活研究グループ連絡協議会会長)



岸川政之
(三重県多気町まちの宝創造特命監)



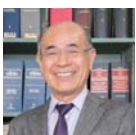
原田弘子
(マネジメントオフィスHARADA代表)



木下斉
(一般社団法人エリア・イノベーション・
アライアンス代表理事)



藤崎慎一
(株式会社地域活性プランニング
代表取締役)



後藤孝典
(弁護士法人虎ノ門国際法律事務所
代表弁護士)



マリ・クリスティーヌ
(異文化コミュニケーター、
東京農業大学客員教授)



殿村美樹
(株式会社TMオフィス代表取締役)

※五十音順、敬称略



ふるさとづくり有識者会議



宮崎県高千穂町視察



千葉県佐倉市視察



長野県中野市視察

みらいのふるさとを担う

こどもたちへ

きらめく青田の上をさわやかな風が吹きぬける。

大漁旗をなびかせた漁船が、陽にやけた笑顔に乗せて家族の元へ帰ってくる。

丘を切り開いて生まれたニュータウンに、新しい「祭り」がはじまった。

生まれた場所とは違うけれど、この空気、この笑顔、このつながりを、
私は、「ふるさと」と呼びたい。

こころをよせる。そこにかかわる。

今、私たちがこの国の「ふるさとづくり」に真剣に取り組むことで、
失われつつある「ふるさと」は、新しいかたちに生まれ変わります。

未来のこどもたちもまた、「ふるさと」で育っていきます。

祭りを支え、民話を伝え、個性あるその土地の発展のために
知恵をしぼり、汗を流し、そこで生きていくことに誇りをもちます。

そんな「ふるさとづくり」をはじめるのは、

今、この時をおいてほかにありません。

この提言が、皆さまの「ふるさとづくり」のきっかけとなりますように。

そして、各地ではじめられた取組が、さらなる成果をあげていきますように。

私たちは今後も、議論と活動を重ねてまいります。



「ふるさとづくりガイドブック」は、
「ふるさとづくり有識者会議」でとりまとめた
「ふるさとづくり」推進中間報告の概要を簡潔にまとめたものです。
ぜひご活用ください。

「ふるさとづくり有識者会議」については、
首相官邸ホームページをご覧ください。
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/hurusato/>)